

ひまわり

No.322号

知ること 関心を持つ人を増やすこと 手を差し伸べること

ウクライナ危機が発生してからすでに一年が経ちました。

そこでは、生きていくために不可欠な電気や水道などのインフラが破壊され、冬は寒さの中、常に命の危機にさらされ、家族や友人といった身近な人の死を数多く経験し、今なお長期間先が見えない生活を送っている人たちがたくさんいます。そこでの暮らしは私たちの想像をはるかに超える過酷なものだと思います。

そして、ウクライナのみならず、世界には同様に人道支援を必要としている人たちが本当に多くいます。例えばミャンマーで迫害されてきたロヒンギャ難民、現在90万人以上がバングラデシュで過密で劣悪な環境の中、厳しい難民キャンプを強いられています。2011年に独立した世界で最も新しい国である南スーダンでは、独立前から現在もなお半世紀以上に渡って度重なる紛争が続き、そこに住む人々のほとんどが平和というものがあることを知ることなく命の危機とともに暮らしています。シリアでは2011年からの内戦が未だ終結せず、さらに今年の2月の大地震による深刻な被害が人々の暮らしをさらに過酷なものにしています。ここには全て書ききれませんが、他にも紛争や自然災害などで多くの国や地域で苦しんでいる人たちがいて、暴力や虐待、食糧難、感染症など多くの困難にて人間らしい生活を送ることができなくなっています。

ニュースなどで頻繁に報道される地域というのはほんの一部であり、私たちにとっても遠い国の自分たちとは関係の薄い出来事として捉えられてしまうかもしれません。しかし私たち一人一人が、可能な時に、少しでも思いやりの心をそういった弱い立場に置かれている人たちに向け、手を差し伸べることで、そこで暮らす人々の生活、境遇を良くすることができると思います。

手を差し伸べるためには様々な方法があります。たとえボランティアに参加できなくとも、可能な範囲で寄付をすることはとても大きな助けになりますし、一番大切で誰もがすることは、まずは能動的に知ること、関心を持つこと、そして関心のある人を増やすことだと思います。ニュースや本などの他にも今はインターネット、SNSなどでも様々な情報を得ることができますし、身近な人とこういった話題の話をすることだけでも、関心が広がり支援のきっかけになると思います。

世界の中で多くの人に知られることなく苦しんでいる人たちの生活がより良いものになるよう、できることから行動をしていきたいです。（副院長 西村）

在宅ホスピスフェスタ 2023

最期までいきいき
生きろうや 今、縁と援の
ある暮らし

今年の在宅ホスピスフェスタは、アクロス福岡(4階国際会議場)で開催され、オンラインとの同時配信で行われました。

オープニングコンサートは山の音楽家Shanaによるオカリナ&ギター演奏。

今年は花に纏わる楽曲「野に咲く花のように、さくら、ザ・ローズ、ハナミズキ」の全4曲で、会場全体に優しく心地よい音色が響き渡りました。



ミニ講座①は「在宅ホスピスと訪問入浴お風呂に浸かりたい～いつもの安心をずっと」。

アサヒサンクリーン在宅介護センター中央事業所所長の本庄喜子さんを含め登壇したお二人からは、病気をはじめ様々な要因で寝たきり(要介護)になった方への「訪問入浴サービス」について、要介護度別に利用者とのエピソードを交えながらの説明でした。訪問入浴は、看護・介護職員3名ほどのスタッフが、ご自宅に専用車両で訪問。体調確認を行った後、居室のベット周辺に浴槽を設置し、浴槽への移乗から洗顔、洗髪、洗体が行われます。

また、会場の展示



コーナーでは、実物の浴槽が展示され、参加者が入り心地などを確かめていました。

ミニ講座②は「在宅ホスピスに関わるケアマネジャーの役割」。

訪問看護ステーションつばさ所長の小野幸代さんより、看護師でもあり認定ケアマネジャーの立場から、介護が必要になっても住み慣れた家で最期を迎えたい、家族で大切な時間を過ごしたいと願う本人やその家族からの相談を受けて、意向を汲み取りながらケアプランの作成や介護認定の申請の代行等を行うケアマネジャーの役割について、分かりやすくお伝えいただきました。



以上が午前の部で休憩となり、会場内のスクリーンでは、「在宅ホスピス啓発事業紹介」のビデオレターが映し出され、在宅ホスピスボランティア養成講座の様子や各地のボランティアの会の活動などが紹介されました。



午後からは「在宅ホスピスを語る会」。
ご家族を自宅で看取り体験された方や、在宅ホスピスボランティアの話を通じて、在宅ホスピスについての理解を深める会です。

一組目のテーマは「どうしてできた？一人暮らしの在宅ホスピス～全介助が必要であっても家で過ごしたい思いに寄り添って」。
生まれた時からの脳性まひ、言語障害がある方でこれまでに様々な支援サービスを受けながら生活してきた70代男性Aさん。
直腸がんに罹患し、ターミナル期には全介助が必要になりましたが、最期はご自宅で

過ごしたいという思いが強かったため、多職種のチームで一人暮らしを支えました。登壇者はAさんを在宅で支えた、みどりの杜病院院長の原口勝先生、自立センターちくごの川島由紀子さん、八女筑後訪問看護ステーションの酒井亜紀子さんの3名。

それぞれ医師・訪問ヘルパー・看護師の立場から、一人暮らしのAさんの希望に沿った在宅ケアを行うため、緊急時の連絡体制や24時間対応等チームが連携しながら関わった様子が話を聞いて伝わってきました。またAさんは、好きな音楽のコンサートやイベント、短歌集・自叙伝の執筆活動などを大切にされており、30年以上生活を支え、慣れ親しんだ訪問ヘルパーたちを中心に、家族同様の思いで関わられていたようです。

二組目は「介護サービスを利用してできた家での看取り」。

24時間の介護が必要になった92歳の女性Tさんを様々な介護サービスを利用しながら、最期はご自宅での看取りを経験されたご家族

の話です。お話は居宅介護サービスわかたけのケアマネジャー湯野光代さんとTさんを介護したお二人の娘さんたちの3名。

要介護認定を受けるまでのTさんは、娘さんとフィットネスクラブに通ったり、デイサービスを利用するなど、元気に過ごしていました。80代後半から度重なる転倒や骨折により入退院を繰り返すなか、入院先で誤嚥性肺炎になり、経鼻経管栄養に。その後Tさんが望む「食べたい」という気持ちに寄り添い、口からの食事も可能な胃ろうを造設しました。また入院の度に「家に帰りたい、入院したくない」と訴えていたTさん。ご家族も「最期は自宅で過ごしてもらいたい」との思いから、主治医を中心に支援者とも何度も話し合い、自宅で看取ること・救急搬送は行わないことを皆で共有しました。要介護5となり、ターミナル期には、介護に関わる全員が慌てて救急搬送を行わないように、親戚への相談も綿密にしていたと語る娘さん。夜間は娘さんたちが交代で介護にあたり、最期はご家族に見守られながら、安らかに息を引き取りました。

小さなたねだより

イベントを紹介します

小さなたね 生活支援員 清水 英二

2月のイベントは節分で豆まきや飯盛神社に出掛け、3月はみんなで「うれしいひなまつり」をハンドベルで演奏したり、柳川の伝統的な「さげもん」を紙ねんどで制作して色を塗りました。それぞれ個性にあふれた作品となり素晴らしいものになりました。また、小さなたねのホームページがリニューアルしました。是非ご覧ください。



2月



地域生活ケアセンター小さなたねホームページ
<https://www.chiisanatane.com>



3月

Event 催し物・イベントのご案内



クリニックからのお願い



新型コロナウイルス感染症対策
～発熱時の受診について～

発熱もしくは風邪症状のある方は
お車の中で待機していただくか
こちらが指定した時間に
受診していただくことで
発熱や風邪症状のある方との接触を
できる限り避けるようにしています



発熱または風邪症状のある方は
まずはお電話にてご相談ください
受診できる時間や受診する方法について
ご案内いたします

にのさかクリニック
☎ 092-872-1136

症状や経過によっては、
他の医療機関へ受診をお願いする場合があります



定期の受診、その他の症状で受診される方は
できるだけ12時までの受診をおすすめします

皆様のご理解とご協力をお願いいたします

にのさかクリニックの春



今年も桜がきれいに咲きました



今年は天気の良い日が続き、当院の裏庭にある桜もきれいに咲きました。

来院される皆さまへ



マスク着用をお願いいたします

感染予防のため、職員はマスクを着用しています。来院の皆さまも、引き続きマスク着用のご協力をお願いいたします。



		月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
9:00	午前	外来診療		訪問診療	外来診療		
13:00		昼休み	健康教室		昼休み		休診
14:00	午後	訪問診療			訪問診療		
17~18:00		※外来診療			※外来診療		

※ 午後5:00~6:00の外来診療は、訪問診療の都合により診療開始時間が遅れる場合や診療ができない場合がございます。診察をご希望の方は、事前にお電話いただくと幸いです。